



通信

No.3 2014年1月
発行 **はちみつ會**

ホームページ <http://hachimitsukai.jimdo.com/>
寄付金振込先：ゆうちょ銀行
ゆうちょ銀行から 00150-8-711082
他行から 〇一九支店 当座 0711082
いずれも口座名義：ハチミツカイ

11/30~12/1、はちみつ会のメンバーほか7人で初冬の福島を訪れました。
福島、川俣、浪江、二本松、郡山…、今回もたくさんの出会いがありました。
震災から3年を迎えようとする福島で、私たちが見たこと・感じたことをお伝えしたいと思います。

森遊びツアーに参加した福島のお母さんたちとの同窓会

事故渋滞に巻き込まれ、1時間程遅れてしまった私たちを、明るく出迎えてくれたお母さんたち。
楽しくお食事会が始まり、話

していくうちに自然と福島の現状の話となりました。出迎えてくれた時とは違い、真剣な表情で話してくれました。

住んでいる所はまだ除染の計画すらない。外遊びを控えているため、体力が低下しているのが県外へ出て野外活動させたい。休みの日はママ友とお金を出し合って車で福島県外まで出て子供を遊ばせている。こういった生活が負担となっている。幼児期に屋外活動の制限があり土や草を触らないようにしていたため、安全な所へ行っても泥遊びを勧めても嫌がったり、草花に触れようとしない。自宅周辺は放射線管理区域より値が高いというのに終わったこととして片付けて欲しくない。元の福島に戻った時が終わりではないか？原発問題がまだまだ進行中で毎日放射能に怯えて生活していることを忘れて欲しくない。

このような切実な話を聞きながら、私たちに出来ることは何だろう…、保養を続けて行く事と、一緒に考えて行くことではないかと思いました。



町田の森遊びツアーに参加したお母さんたちが集まってくれました！

「hand to hand project 川俣」今泉さんに聞く川俣町の現状

「hand to hand project 川俣」は、福島県伊達郡川俣の子どもたちの健康を守り、維持するために発足したグループ。放射能に関する現状を

伝えたり、各種検査、講演会、短期・長期保養や食品等の情報提供、支援物資の分配など、多岐にわたる活動をされています。はちみつ会とは保養活動を通じて縁ができました。今回、福島で市民活動をされていて親の立場でもある今泉さんとお会いできるのがとても楽しみでした。

実際にお会いした今泉さんは、私の理知的な友人と似ている(!)方で、勝手に親近感を募らせました。大きなみかんとルイボスティでもてなして下さりながら、さっそく川俣町の様子を話され始めました。

川俣町は、避難区域の浪江町の隣に位置しており、お会いした場所でのモニタリングポストの値は0.435 μ Sv/hでした。いろいろな考えがある中で、子どもたちの健康を守る活動をすすめていくエピソードに、身の引き締まる思いで聴いていましたが、きっぱりと言われたことは、「私たちの所に来てイベントをするのではなく、そちらでイベントをやって呼んでほしい」と。放射線量がより低いところで過ごす機会を増やしたいということであり、保養の需要があるところに足を踏み入れる危なさをも指摘されました。

もっと多くの人に参加しやすい保養を

今回、福島から私たちのツアー初参加の方が、「常に初参加者を受け入れて保養への参加経験者を広げていく」大切さを提案され、その話にとっても共鳴されていた今泉さん。町で保養の呼びかけをしても反応が薄い現状があり、家族内での意見の違いや放射能の話題が出にくい現実の中で、保養が特殊なものとして

扱われていて、多くの人に一般的な情報として伝わりにくいようでした。

私たち、保養を企画する側も、もっと多くの人に参加しやすい企画やしくみを作ること。そんな宿題を頂いたような気がします。

別れ際、「子どもたちが心配だからやってるだけで、私は普通の主婦なんですよ」と言っていた今泉さん。そうですね、ほんとうに。過激でも特別な人でもなく、地に足のついた活動をしている今泉さんと「hand to hand project 川俣」の皆さんと、私たち、はちみつ会も手をつないで やっていきたいです。つないだ輪をひろげていこう。

いまだ片づかない瓦礫の向こうに、福島第一原発の煙突が見える。



所はまだ決まっていないそうです。

瓦礫の仮置き場は50ヘクタール必要ですが、地権者に了解を得なくてはいけないそう。町民は46都道府県に広域分散避難しており、地権者との交渉のため職員が自ら出向くことも多いそうです。仮置き場を確保することが優先されるため、除染も瓦礫処理も進んでいないそうです。

請戸川の橋の上に立ちました。この川には鮭が遡上してくるそうです。遅れてやってきた鮭がぼちゃんと跳ねていました。10月にはたくさん遡上していたとのこと。ここから、あの福島原発の屋根と煙突が3本望まれます。

浪江町の沿岸部は帰還指示準備区域で、放射線量も0.1~0.2 μ sh/hと低くなっています。山側に行くにつれ、居住制限区域、帰還困難区域と、放射線量は高くなっていきます。帰還困難区域の住宅への立入りは月に1回。町の面積の8割が帰還困難区域です。

商店街、住宅地を車で回りました。どこにもある街並み。けれど、どこも異様な静けさに包まれていました。よく見ると、ところどころで地震でひしゃげた家がそのままになっていました。多くの家で盗難にあっており、体重100キロ近いイノシシが町の中を歩き回り、部屋の中はネズミの糞だらけとのこと。

いち早く帰還を実現するために、浪江町役場には30名ほどの職員が戻っています。ただ、上下水道などのライフラインは震災でぐちゃぐちゃのままなので、トイレは仮設のトイレ、水は浄水できるタンクを備えつけてあるそうです。

浪江町の 避難指示解除 準備区域を 訪ねて

2日目の朝、二本松の農家民宿「ゆんた」を出発したメンバー3人は、南相馬の「道の駅」で浪江町の復興専門支援員の菅野さんと待合せました。

途中、飯館村を通りましたが、車内でも1 μ sh/h近い線量に、高濃度の放射能雲がこのあたりを通ったことを肌で感じました。

浪江町に入る前に検問があり、菅野さんが通行許可証を見せて通過します。浪江町のなかでも放射線量が比較的低い避難指示解除準備区域は、9時から16時までなら許可証があれば入れます。

車窓には、広い沿岸低地の遠くに森や阿武隈の山々を望むのどかな風景。田畑だった所は、雑草が高く伸び、そして立ち枯れています。人気のない風景。草のはえた田んぼには、船やひしゃげた車がひっそりと横たわっていました。家があるのでよく見ると、一階部分は津波でやられ、もう人の住めない家ばかり。まだほとんど何の手も入れられていません。

浪江の町を歩く～瓦礫と静けさのなかで

浪江町では、今回の震災での直接死は149名、行方不明は33名だそうです。震災の時には原発事故による避難のために、助かる命も助けられなかったとのこと。現在は毎月11日に遺体捜索をしています。道路の途中に卒塔婆が何本か建てられた供養地があり、お花が沢山飾られていました。

瓦礫の山があちこちにできています。8,000Bq/kg以下は一般の瓦礫と同様に選別して処理しますが、それ以上のものは中間貯蔵地に置かなくてはならず、場

まちづくりの議論は始まったばかり

浪江町としては、避難指示解除準備区域の沿岸部を中心に平成29年3月の帰還開始を目指していますが、このように原発が見える町に本当に帰れるのか、という菅野さんの言葉が心に残りました。しかも川の

水源は高線量の山なのです。高齢者は帰りがついでいます。ただし高齢者だけでは住めない状況もあります。

現在、浪江町および住民に求められているのは、本当に近い将来に浪江町に住んでいいのか、いまが決断する時だとのこと。「まちづくり検討部会」が開かれ、町の人たちで議論が始まったばかりとのことでした。

「震災を自分のこととして考えてほしい」

仕事をすすめていく上で足りないのは、専門的な技術力、ファシリテーターだといいます。行政は縦割り社会で、それではうまくいかない部分が多く、民間企業や様々な団体と協力しながら、役場内の専門力を高め、横のつながりを作っていきたいとのことでした。

菅野さんは、みなさんに震災のことを想像して、もっと自分のこととして考えてほしい、2年8ヶ月たった町がどんな町になっているのか、自分の生活に置き換えてほしい、いつか東海や首都圏が同じようなことになったら、当事者としてどうするのか、と私たちに問いかけられました。それを考えることが、せめても、この原発震災のプラスの役割ではないか、と。

浪江町の 仮設住宅自治会 の皆さんとの 再会

二本松市内の安達運動場仮設住宅に行き、自治会長や班長さん5人に話を伺った。今回は今年の7月に訪れたが、あまり変化はないとおっしゃっていた。

平成29年に避難解除になるが、先が見えず不安が募るばかりだ。もちろん今までの家に帰りたいという気持ちはあるが、現実的に難しいという点もある。

この仮設住宅は高齢者が多く、一人暮らしの方もいる。週に数回、健康診断や社協の方が訪問しているが、亡くなる方もいるのが現状だ。雇用状況も相変わらず不安定だ。住所がない、補償金をもらっているなどの理由から会社は雇おうとしない。

震災から3年弱が経過しようとしているのにも関わらず、多くの住民が問題や不安に悩まされ生活していると思った。今まで支援して下さった多くの方々にお礼を言い、自立したいが、そううまくいかない現実や苦しみがあるのだ、と自治会長さんは語った。

我々に今できること、本当のニーズはいったい何なのか、深く考えさせられた。

仮設住宅自治会の皆さんと。先が見えない現実は何も変わっていない。



*浪江町の現状については、2014年2月1日(土)14~17時、菅野孝明さん(浪江町復興支援専門員)をお招きして、講演会「浪江町のいま~町ごと避難した場所で起きていること」を、町田市内で開催します(会場:ことばらんど大会議室・JR町田駅より徒歩8分、事前予約400円/当日500円)。詳しくは、同封のチラシ、もしくは「はちみつ会」ホームページをご覧ください。

「うけいれ全国」 保養相談会を 見学して

「hand to hand project 川俣」の今泉さんに紹介いただき、「うけいれ全国」(311受入全国協議会)が主催する、保養企画の現地相談会「2013

ほよ~ん相談会」を見学しました。

「うけいれ全国」は、3.11後、原発事故被災地からの避難・保養の受け入れを行なう全国の団体のネットワーク。2012年7月に発足し、受け入れ情報の共有や相談のマッチング、保養データベースの運用、被災・避難地域での相談活動、などを行なっています。

郡山の会議室には全国20団体のほどのブースが並び、子どもの手を引いた親子がひしめきあっていました。私たちは、空いている相談ブースで活動団体のお話を聞かせていただきました。

山形では、福島からの近さを生かし、日帰りで気軽に参加できる企画や、常設の遊び場の設置などを行なっています。北海道の団体は、企業とうまく連携して、「はみがきキャンプ」など企業のアピールにもなる特徴のある企画づくりをしていました。神奈川では、県内でネットワークを作って活動を共有したり、公共機関への要請などを連携して行なっているそうです。

多くの団体が、短期保養だけでなく、中・長期の保養や移住も視野に入れ、地域のつながりを活用しながら活動していました。また、今回の相談会の実施にあたっては、福島グループが現地での呼びかけや会場準備などを担っており、福島の人々にも主体的にかか

わってもらうことが重要、との意見もいただきました。

保養の機会の充実をめざして

どのブースも相談者の列が途切れず、必死な顔で真剣に話を聞いている姿が、胸に迫りました。はちみつ会のツアーに参加された親子も何組か来ていて、年末や春に参加できる企画を探しているとのことでした。

多くの団体が保養に取り組んでいます、こうした機会を必要とする現実に対しては、まだまだ足りません。民間の取組みを支援すると同時に、学校単位での「移動教室」のように、誰もが参加できる機会をつくることも重要だと思いました。

これまで、近隣の団体に学びながら手さぐりで活動をすすめてきましたが、今回の相談会に参加したことであらためてやるべきことが見え、自分たちの活動を振り返る貴重な機会になりました。

今回のツアーには、ボランティアサークル「青空」関係の大学生2人も参加。感想を寄せてくれました。

私は今回が初めての福島でした。震災後の福島についての知識は、ニュースや新聞など、間接的なものしかありませんでした。直接お話を伺える機会を与えてくれた皆さんには本当に感謝です。

2日間を通して一番感じたことは、大人が子供たちを思う気持ちの大きさです。震災後の福島の問題である放射能汚染について聞き、胸が痛くなる思いでした。どの方の話を伺っても、子どもたちが外でのびのびと遊ぶことができない現状や、子どもたちの将来が不安など、子どもたち中心のお話でした。

また、放射能汚染の深刻さは自分が

思っていた以上でとても驚きましたが、真実を知り目を背けてはいけない問題だと強く思いました。福島の現状を知った今、保養の大切さを改めて実感しています。

子どもでもなく、まだ大人でもない私たちに来ることは限られてはいますが、まだまだたくさんあります。時間と共に震災のことが薄れている現状ではありますが、忘れないこと、自分が見て聞いたことを伝えていくことも、私たちが被災地に対して出来ることの一つです。また保養のボランティアにも積極的に参加していきたいと思っています。

私たちを温かく迎えてくれた福島の皆さんやこの機会を与えてくださったはちみつ会の皆さん、本当にありがとうございました。(M・Yさん)

被災地はもう復興しているのだとばかり思っていた私。福島に初めて行って見て、お母様方や仮設住宅に住む方、そして保養を提供する方など、さまざまな立場の方に話を伺う機会をいただきましたが、そこで共通していたのは、まだ復興は何も終わっていないということでした。

放射能のデータは都合良く改ざんされ、復興住宅の予定も避難解除の予定も展望が見えず、自分たちの生活に欠かせない情報も秘密にされてきた、ありえないような状況。私は、被災地と、私たち被災してない側とのギャップに驚きを隠せませんでした。

頭の片隅には残っているものの、半分忘れたように生活していた自分を恥ずかしく思うとともに、いまだ甚大な被害をこうむり続けている被災地の現状をもっと発信していかなければと思いました。(C・Yさん)

はちみつ会
からの
お知らせ

「まちカフェ！」に出展します

まちカフェ！は、町田で活動するNPO・地域団体が市民向けの企画をもちよって開かれるお祭りです。

はちみつ会は、「森遊びツアー」の様子、浪江町訪問の報告などを、写真や映像、メッセージで紹介します。お子さんが遊べる工作コーナーもありますので、ゆっくり見ていただけます。B級グルメグランプリに輝いた「なみえ焼きそば」や福島の手作り品も販売！ぜひ遊びに来てくださいね♪

日時 2014年1月19日(日) 9時半～17時

●場所／町田市役所 (JR 横浜線・小田急線 町田駅から徒歩 10分)

●主催／まちカフェ！実行委員会 協力／まちだ NPO 法人連合会 + 町田市市民部市民協働推進課

